

平成 2 8 年 度

研 究 紀 要

創

第 1 9 号

TSUKURU



北海道今金高等養護学校

目 次

<巻頭言>

第 1 章 研究の全体像 3 ～ 8

第 2 章 課題研究 9 ～ 2 5 1

第 3 章 寄宿舍研究 2 5 2 ～ 2 9 4

第 4 章 プロジェクト研究 2 9 5 ～ 3 1 1

第 5 章 研究の成果と課題 3 1 2 ～ 3 1 6

<あとがき>

<共同研究者>

巻頭言

本校では、平成27年度から「卒後を見据えたキャリア発達を促す指導法の研究～協同学習と生活指導の充実を目指して～」に3カ年計画で取り組むこととし、今年度が2年次目となりました。年間を通して、授業担当者は年1回授業研を行い、授業研究を通して、協同学習の活用に取り組んで来ました。しかし、昨年度の授業研の記録や授業研での授業を見ると、協同学習の展開には様々な事例がありました。例えば、話し合いや教え合いの進め方を例示せずに、単に話し合いの時間を設定し、生徒に「さあ、話し合いなさい。」と指示を与えることに止まる事例も見られました。日本で特別支援教育における協同学習の取り組みを研究している湧井（2012）は、協同学習には5つの要素があり、授業では必ず5つの要素（①互恵的な相互依存関係、②対面的な相互交渉、③個人としての責任、④社会的スキルや協同・協働スキル、⑤チームの振り返り）を盛り込む必要があるとしています。

今年度の研究では、5つの要素を授業に盛り込むこととし、全員が同じスタンスで協同学習を活用した授業が可能となるように、授業マニュアルを作成し、マニュアルに基づいて授業研究を行うこととしました。併せて、教科や指導形態別のグループ研では、協同学習を活用した授業を分析し、協同学習の5要素別に活動の事例を集約、整理、検討し、事例集を作成しました。研究紀要に収められている活動の事例集は、協同学習を活用した授業設計と授業展開する上で参考となるものであると考えています。

授業マニュアルを活用した授業研究と活動事例の詳細な検討と修正をしていった結果、授業担当者の協同学習に対する理解は飛躍的に高まってきました。

しかし、実際の授業での話し合い活動を見ると、生徒はどうしたらよいか分からず、発言力のある生徒が主導する一方的な「話し合い」になるとことがあります。その様子から、説明・相談・話し合いなどの際の協同学習スキルの指導が十分ではないことが分かります。また、個々の授業担当者を見ると、まだ協同学習の本質が理解され切れていない事例もあります。

協同学習の5要素は見方を変えると、「よい授業」の構成要件であるとも言えます。「主体的・対話的で深い学び」を成立させる上では、協同学習は効果的な指導の切り口になるばかりか、知的障がい教育の授業を確実に向上させ、生徒の能力開発につながるものであると考えております。生徒が主体的に課題とその解決のための活動に取り組んでいるときこそ、学習経験が能力や知識・技能、態度などの確実な習得と形成につながります。

今後の課題としては、協同学習の5要素に加えて、「マルチな能力」（生徒個々の得意な能力や興味関心等）を付け加えて授業に盛り込むことが挙げられます。その中には、内省的な活動であるメタ認知も含まれます。生徒は、経験を振り返って点検・評価したり（メタ認知的モニタリング）、相手の状況に応じて目標や行動を修正したりする（メタ認知的コントロール）ことには課題があり、意図的・計画的なメタ認知に関する指導も必要であり、このことは今後の課題として残されています。

校内研究の推進に当たっては、本校の研究アドバイザーとして、北海道教育大学函館校の北村博幸教授に、本校まで足を運んでいただき、重要かつ示唆に富む御助言をいただき、研究を推進することができました。深く感謝申し上げます。

本研究は、知的障がい教育におけるキャリア教育の創造という大きなテーマに協同学習の観点と生活指導の観点から迫ろうとするものです。是非、忌憚のない御意見と御助言をいただければ幸いです。また、今後とも本校への御理解と御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成29年3月

北海道今金高等養護学校長 高 嶋 利次郎